

点と線と面で支える初年次教育

笹金 光徳

(高千穂大学経営学部教授 (FD委員会委員長))

一 はじめに

現在、高千穂大学(成田博学長)と高千穂幼稚園からなる高千穂学園(藤井耐理事長)の歴史は、創設者川田鐵彌が、明治三六年(一九〇三年)現在の新宿区大久保に高千穂小学校を開設したことに始まる。その後、幼稚園、中学校を開設し、大正三年(一九一四年)私学としては我が国最初の高等商業学校である高千穂高等商業学校を現在学園が所在する東京都杉並区大宮(最寄駅は井の頭線、西永福)の地に開校した。高千穂高等商業学校は昭和二五年(一九五〇年)の学制改革により商学部商学科からなる高

千穂商科大学として再スタートした。平成二年(一九九〇年)に商学部商学科に加え経営学科を新設、さらに平成八年(一九九六年)には大学院経営学研究科修士(博士前期)課程を、続いて平成一〇年(一九九八年)には大学院経営学研究科博士後期課程を開設した。また、平成一五年(二〇〇三年)の学園創立一〇〇周年を控えた平成一三年(二〇〇一年)、新たな一〇〇年の礎を築くべく、商学と経営学の学問上、教育上の相違性を明確にするとともに、学生の多様なニーズに対応することを意図し、商学部から経営学科を独立させ経営学部を設置した。名称も高千穂商科大学から高千穂大学へと変更し、商学部商学科、経営学部

経営学科の二学部二学科体制により、教育研究のさらなる充実、飛躍を目指し新たな一歩を踏み出した。さらに、平成一九年（二〇〇七年）には創立者川田鐵彌の建学理念である「人格教育」を学部教育として具現化すべく人間科学部を開設した。ここに三学部三学科・二研究科（修士課程・博士後期課程）からなる教育・研究組織が構築されることになった。

本稿では、このような長い歴史（学園創立一〇七年、大学創立六〇年）を持つ高千穂大学において、初年次教育が定着してきた経緯を紹介しつつ、その内容・特色について解説する。

二 初年次教育の中心の場「ゼミ」の変遷

本学における初年次教育は多面的・統合的であり、さまざまな構成要素より成るが、入学直後よりその中心の場となるのは、週一コマ通年で行われる全学部共通必修科目「ゼミ」である。ゼミは、全専任教員の約七割を担当教員とし、一クラス一五〜一八名で構成される学部別クラスで開講されている。

ゼミは、現在全クラス共通シラバスで行われているが、

開設当初から平成一二年度までは、少人数ゼミ教育を特長とする本学における二年度以降の専門ゼミに対する準備という位置付けにふさわしい内容を各教員が自由に立案し、別々のシラバスで行われていた。すなわち、シラバスを提示し、入学時に一年次生が選択するという方式で、クラスが決定されていた。しかしながら、「少人数クラス」という趣旨から人数の上限を設定する必要があったため、応募者の多いクラスは抽選となり、抽選に漏れた学生からの不満が出る、という問題を抱えていた。また、それとは別に、提示されたシラバスから受講生が解釈した内容と現実の内容が一致していない、厳しいクラスと甘いクラスがある、といった不満もあった。そこで、これらを解決するために、ゼミの内容をある程度共通化すべきではないか、という気運が高まってきた。一方、その当時は、「学生のユニバーサル化」が叫ばれ始めた時期でもあり、基礎学力の低下、入学目的の希薄化、学習意欲不足、不本意入学といった学生の傾向が、成績不良者、留年生、不就学者、退学者、就職活動で苦戦する学生、不就卒業生を増加させる、といった兆候が見え始めていた。こういった文脈にそって、「新しいゼミ」によって就職活動に強い学生の礎を造ってほしい」という就職委員会からの願いが、改革を推し進める大

きな要因であったことも事実である。

これに対するゼミ改革の第一歩として、経営学部が新設された平成一三年度に「シラバスの記述の共通化」が行われ、「問題発見能力・作文能力・発表能力の向上」が授業目標として明記された。ただし、同一カリキュラムになったわけではなく、六種類のテーマに分けて担当教員を配置し、学生はテーマを選択し、テーマ内のクラス分けは、機械的操作で行うという方法がとられた。また、毎回の授業内容は、テーマに沿って担当教員が自由に決めることとなった。言い換えれば、内容の共通化・標準化の必要性を認識しながらも、前年度まで完全に担当教員の裁量に任ざれていた授業内容を一気に共通化することに対する担当教員からの抵抗感を緩和しようとする妥協案であった。その結果、「抽選漏れ」という不満はなくなったものの、「内容に対する不満」や「不公平感」は前年度までと変わることはなく、根本的な解決には至らなかった。

そこで、翌平成一四年度には第二の改革が、当時学長であった藤井現理事長のリーダーシップのもとで当時教務委員長であった成田現学長を中心とする改革プロジェクトによって行われた。

その内容は、「全クラス共通の授業目標と授業計画」、「共

通テキスト」、「入学直後の学外研修（フレッシュヤーズ・オリエンテーション）との連携」、「年間数回の共同授業の実施」、「大学側がクラス構成員を決定」、というように抜本的な改革を多く含むものであった。実際の授業は、前期は共通テキストを用い、文章作成指導を通して文章作成能力、読解力、論理的思考力の向上を目指すことを目的とする実習が主体であり、後期には情報収集能力、コミュニケーション能力、レポート作成能力の向上を目標に指導した。

平成一五年度には、テキストを一つに限定せず複数から選択できるようにして、柔軟性を持たせた。これは、共通テキストによる画一的な指導よりも、専門性も教育研究歴も千差万別な各教員に利用しやすいテキストを選択させ、共通の到達目標を定め、その達成を目指すよう指導するという方針をとるほうが学生指導上効果的だと判断したためである。

平成一六年度には、「ゼミのコンセプトと教育目標の再確認と明確化」という作業を当時教務委員長であった筆者を含む教務常任委員会で行った。

授業科目が基本的にセメスター制へ移行した平成一七年度においては、ゼミは通年科目のままで継続され、「高千穂マスタープラン」と「学生生活目標管理シート」から

なる本学独自の「学習ポートフォリオ・システム」を構築し、導入を行った。また、「ゼミイプレゼンテーション」を試験的に導入した。さらに、春学期に比べて担当教員の裁量が多く残されていた秋学期の授業内容についても標準化が行われた。

平成一八年度には、共同授業「ゼミイプレゼンテーション」を必須化した。また、本学としてはピアレビューとしての初の試みである「ゼミイ授業相互見学」を実施した。

人間科学部が新設された平成一九年度には、「ゼミイプレゼンテーション」をパワーポイント形式から全員発表形式に変更した。

平成二十二年度には、「ゼミイプレゼンテーション」をパワーポイント形式に戻すこと、目標管理シートのコンパクト化等が決定している。

このように大改革が行われた平成一四年度以降毎年のように細かく改善がなされているが、これは、「ゼミイワークシヨップ」や「ゼミイ担当者会議」を行い、現場からの改善提案を収集し、PDCAサイクルを継続している結果である。

以上が、改革の必要性が議論されてから今日に至るまでの約十年間の「ゼミイ」の変遷である。十年前には、導入

教育という言葉は存在していたものの、初年次教育という言葉は全く使われていなかった。さらに、本学では「導入／初年次教育」を意識して改革が始まったわけではなく、教育学を専門としない現場の教員グループが当時の学生をめぐる「好ましくない現状」を打破するためにゼミイを試行錯誤的に改革してきた試みが今日になって典型的な初年次教育の実践的取り組みであると高等教育の専門家の諸先生に認知していただき、このような報告の場を与えられた、というのが実情である。

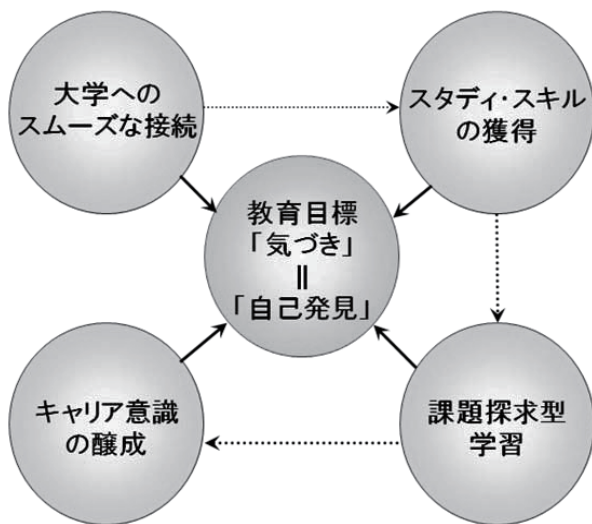
三 ゼミイのコンセプトと教育目標

前章で述べたように、平成一六年度、「ゼミイのコンセプトと教育目標の再確認と明確化」という作業を行った。すなわち現行の初年次教育に関する授業内容と施策をひとつひとつピックアップし、分類し、まとめることによって、ゼミイのコンセプトと教育目標を再認識し、明確化しようとする試みであった。その結果を集約したのが、図表1のコンセプト図である。

これは、①大学へのスムーズな接続、②スタディ・スキルの獲得、③課題探求型学習、④キャリア意識の醸成とい

う四つの目的にそった内容に対してバランス良く取り組むことよって学生自身の「気づき」（自己認識）を喚起するということにゼミIの基本コンセプトを表している。時系列的に述べれば、ゼミIを中心とする本学における初年次教育の目的は、まず、①大学生として望ましい生活規範を身につけると共にクラスメートと良好な関係を保つことよって意欲的な学生生活を送る基盤を整えることである。その上で、②大学生として必要となるスタディ・スキルおよびチューデント・スキルを身につけさせることに重点を置いている。その到達目標は、大学の授業を受け、確実に習得するために必要な能力・技術・意識レベルにまで各スキルを高めることである。そして、自己の能力がある程度高めた段階で後半（秋学期）には、③課題探求型学習をグループワークで行うことにより、問題解決力とコミュニケーション力の双方を育成することに重点を移す。これは、二年初次から始まる専門ゼミナール活動へのスムーズな接続の役割も果たしている。また、四年間を通して徐々に高めていく必要のある④キャリアに対する理解と意識の醸成を行うことも初年次教育の目的のひとつである。これらの目的は、分類は異なるものの、中央教育審議会で提言された学士力に対する四つの指針のうち「知識・理解」、「汎用的技

能」、「態度・志向性」の三点とかなり正確に符合しているものと考えられる。



図表1 ゼミIの基本コンセプト

四 授業内容と施策の分類と概略

図表1の四つの目標に合致するゼミIの授業内容とゼミIに連動する施策を分類整理したのが、図表2である。

各授業内容と施策を「点」とし、点を結ぶ集合体として四つの目標という「線」を形成し、四つの線を包括し、「面」を形成して、全体で統合的に初年次学生を支援しようとするシステムが本学の初年次教育のイメージである。以下に主な施策と授業内容について、概説する。

① アドバイザー制度と学生指導記録

ゼミI担当教員はアドバイザーとして、学生との個人・集団面談を実施し、指導・助言を行う。各学生には異なる個性・適性があり、抱える事情も多様である。それらを担当教員が把握し、面談をつうじてフォローしていくことが意欲面・能力面の双方において効果をあげている。学生と教職員の距離が近い点は小規模大学であるが故の本学の強みであり、それを生かして多様な学生のニーズに対応したサポートを提供できるものと考ええる。

学生は第一回目のゼミIにおいて、入学時の不安や入学後の目標、将来の希望などを学生カルテ（学生指導記録）に記入する。担当教員は後述するキャリア・アセスメント

<p>①大学へのスムーズな接続 フレッシュャーズ・オリエンテーション（学外ガイダンス） 学内ガイダンス（教務・学生生活・情報メディアセンター） アドバイザー制度⇒個別面談 ガンバレ高千穂（一般常識問題） マスタープランと目標管理シート（ポートフォリオ・システム）</p>	<p>②スタディ・スキルの獲得（主に春学期） 文章作成指導 ノートの取り方※ レポートの書き方 情報収集の仕方 定期試験対策※ ※共同授業（模擬授業＆小テスト）を実施し、効果を確認</p>
<p>③課題探求型学習（主に秋学期） テーマに沿った調査 グループワーク（役割分担）と成果のまとめ 全員が内容を理解し、全員が単独で発表（共同授業）</p>	<p>④キャリア意識の醸成 キャリア・アセスメントの実施 フォローアップガイダンス 学習ポートフォリオ・システムとの連動 ガンバレ高千穂</p>

図表2 ゼミIの授業内容と施策の分類

や面談内容をもとに所見を記入する。学生指導記録は、各学生の個人カルテとして次年度以降の専門ゼミ教員に引き継がれ、アドバイザー制度を、四年間をつうじたサポート制度とするために利用されている。

② フレッシュヤーズ・オリエンテーション（以下、「フレオリ」と略記）

フレオリは、大学生活へのスムーズな接続、就学への不安解消を目的とし、入学式直後にゼミの初回授業を兼ねて実施される一泊二日の合宿研修である。フレオリでは、ゼミ研修（初回授業）、ゼミ対抗の綱引き大会、理事長・学長による講話、上級生による授業・学生生活・課外活動の紹介、就職活動報告等のイベントが開催される。これらのイベントをつうじて、大学生活への取組姿勢を自覚させると同時に、学生と担当教員、学生間（新入生同士、新入生と上級生間）の交流を実現している。

運営は、教職員組織を中心としながらも、可能な限り在学生をスタッフとして登用し、上級生の姿を自らの近未来の姿として提示するような環境作りをしている。さらに、理事会、同窓会および父母の会の参加により、本学の特徴である五位一体の学生支援システムを入学直後から体験させる仕組みを整えている。

③ 「高千穂マスタープラン」と「学生生活目標管理シート」

平成一七年度入学生から導入された本学独自の学習ポートフォリオ・システムである。学生は、卒業するまでの四年間の学生生活の見取り図である「高千穂マスタープラン」を参考に、セメスター毎に自ら目標を設定し、「学生生活目標管理シート」に記入する。各セメスターの終了時には自己評価し、改善点を記入する。目標設定時と評価時の二度、ゼミ担当教員は面談を実施し、目標設定・自己評価に対して助言する。これらは学生一人一人が自ら目標を設定し、四年間で着実に成長していくための指針であり、また教員が個々の学生をより効果的にサポートできるように設計されている。これによって、学生自らが半年周期で卒業までPDCAサイクルに沿って行動できる環境が整った。

④ 「ガンバレ高千穂一〇分勝負」（一般常識問題）

「気づき」により将来の具体的目標を設定した学生が、満足できるかたちでその達成に近づくためには、基礎学力の維持・向上が不可欠である。こうした観点から、入学当初の一般常識を就職試験までにブラッシュアップすることを目的として「ガンバレ高千穂一〇分勝負」（以下、「ガンバレ高千穂」と略記）と名付けられた一般常識問題かの出題

を実施している。また、図書館入口付近には「ガンバレ高千穂コーナー」を設置し、一般常識・基礎学力の向上に役立つ参考図書を一括して閲覧に供するなど、サポート体制を整備している。

「ガンバレ高千穂」は、ゼミIでは、授業開始時に、国語、算数、理科、社会、英語から毎週二分野の問題（各一〇問程度）を学生に配布し一五分程度で解答し、授業終了後、各問題の解答解説を自主的に受け取り確認する仕組みで実施されている。一方、「ガンバレ高千穂」には、基礎的専門知識の習得を意図した二年生版と三年生版も学部ごとに用意されているが、ゼミIのような共通の解答時間が確保されていないためあまり活用されていない。

⑤ ゼミIの授業内容

ゼミIの各週の授業内容は、前章で説明した四つの目的のいずれかに必ず対応している。現行では、学習目標が明示されており、学習到達度を評価する基準も具体的に示されている。授業方法はある程度担当者の裁量に任せられているが、ゼミIワークショップが意見交換の場として機能しており、授業改善に役立てられている。また、年間回数「共同授業」が用意されているが、それは各目標の達成度に対する「成果の確認」と「クラス間における授業内容

の差異の解消」が目的である。

五 成果と今後への展望

大学へのスムーズな接続を意図して開始されたフレオリへの学生の満足度は、年ごとに増加しており、その結果は明るいキャンパスの雰囲気を作り出している。また、ゼミ活動へ積極的に参加する学生が増加しているという結果もはつきり出ている。さらに、この二年間を別にすれば、成績不良者・退学者・留年者、不就労卒業生等が大幅に減少しないまでも、横ばい状態にとどまるといふ傾向を維持してきた。然るに、長引く景気低迷と更なるユニバーサル化の影響が、本学の初年次教育プログラムに更なる改善を迫っているように感じられる現状があるのも事実である。

六 おわりに

本報告のタイトルを「点と線で支える初年次教育」とした理由の一つは、四章からわかっていただけだと思うが、実際にはもう一つ違った意味合いがある。アドバイザー制度によって、各初年次学生の支援の中心となるべき担

当者が各ゼミI担当教員（II点）になっているのは言うまでもないが、決してそれは単独ですべての指導・支援を行うわけではなく、教員同士のつながり（II線）、教員と事務職員の連携（II線）、そして教職員全体（II面）でひとりひとりの学生とかかわって学生を成長させようと願う大学の教育姿勢をも包含させている。

現在、筆者は初年次教育学会の理事の一人として我が国における初年次教育の充実のために微力ながらお手伝いさせていたが、現状に至った経緯は、二章の終りで述べた通り、高等教育の専門家が不在で、かつ、どこかの取り組みを参考にしたわけではないのに、初年次教育的実践の形成に至った本学の事例に対して、高等教育研究の専門家が学術的関心を持ってくださったことが発端になったからであり、決して本学の初年次教育が規範的であるからではないと自覚している。事実、本学よりもまとまり良く、高レベルで真剣に初年次教育を考え、実践されている大学がたくさんあるという現実を把握している。また、各大学にふさわしい初年次教育は大学ごとに異なっているはずであり、他大学の事例を「直輸入」しても大きな効果が得られるとは思われない。しかしながら、本学のような事例であっても参考資料として、全く価値がないわけではない。

いと判断し、執筆を引き受けた次第である。

もともと、筆者の表現力の拙さもあり、本学の初年次教育について、的確に表現できているか確信がない。幸いにして、平成二二年九月十一日～十二日に本学において、初年次教育学会第三回大会が行われることになっているので、疑問点を持たれた読者諸氏は、ご来学された際、筆者に直接声をかけてくだされば幸いである。